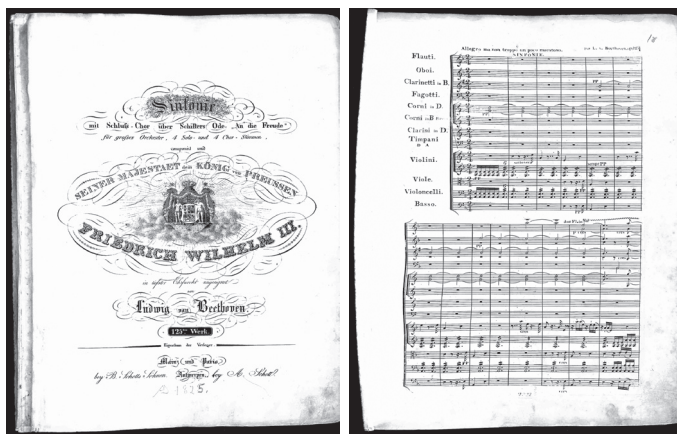


最後の交響曲が語る、 作曲家の生と死と理想

澤谷夏樹



ベートーヴェン〈第九〉の楽譜（初版、1826年）の表紙と冒頭ページ
南楽音楽文庫より ©読売日本交響楽団

「第9」のジクス

交響曲には忌み数がある。「9」だ。発端はベートーヴェン。作曲家は1824年に交響曲第9番を完成させ、その3年後に世を去る。〈第九〉は最後の交響曲となった。後輩世代のシューベルトも、数え方によっては9番目にあたる交響曲〈ザ・グレート〉を末子として、天に召された。ドヴォルザークの最後の交響曲〈新世界から〉も、この作曲家の「第9」だ。ブルックナーは9番目の交響曲を書き上げられなかったが、自作の〈テ・デウム〉を第4楽章に充てるよう周囲に伝え、作品にいちおうのまとまりを与えたのち、死の床についた。いずれの作曲家も9番目を最後の交響曲として、人生にピリオドを打っている。「第9」が交響曲作家の命を奪う。「第9」のジクスである。

このジクスを気に病んだのがマーラーだ。マーラーは第8交響曲を完成させた後、9番目の交響曲へと筆を進める。作曲家はこの時期、「死」を強く意識し始めていた。幼い長女の死、みずからの心臓病。取り掛かった交響曲はよりによって「第9」だ。先達のいわれが頭をよぎる。マーラーは死を恐れ、自作に「9」をつけるのをためらった。そこで9番目の交響曲から番号を取り除き、〈大

地の歌〉と名付けることで、心中の不協和音を解決しようとした。「第9」ではないが、9番目の交響曲を無事に書き終えたことで、マーラーは安堵した。

話はこれで終わらない。続いて取り掛かった10番目の交響曲に、マーラーは「第9番」のナンバーを与え、首尾よく完成させた。ところが、11番目にあたる第10交響曲を書き上げることなく1910年、この世に別れを告げる。マーラーは結局、「第9」に命を奪われた。番号を“ごまかして”まで抗った運命に、からめとられてしまった。

死から生、死からより深い死

マーラーは純器楽と声楽付きとの間を行ったり来たりしながら、交響曲創作の道を進んだ。第9交響曲の直前2作は声楽付き。当の「第9」は純器楽で、創作史中期、つまり「第5」から「第7」の路線に戻っている。古い型に戻っているとはいえ、「第9」の手のこんだ引用技法は新鮮だ。

隣り合った音へと下行する音形を2回繰り返すテーマ。これは既作の歌曲の中でつねに「死」を喚起する役割を負ってきた。これが第9番の第1楽章の中で変形を繰り返すと、J. シュトラウスのワルツ〈楽しみ人生を〉になり、ベートーヴェンの〈告别ソナタ〉冒頭の音形になる。さらに進むと葬送行進曲風にもなる。こうした引用を通してマーラーは、「回想」「惜別」「葬送」を描き、そこから聴き手に「死」を連想させようとする。



晩年のマーラー

ちなみに「死」を匂わせつつ「生」の方向へと進んでいったのが、中期の交響曲第5番だ。さまざまな引用は第9交響曲とも共通するところ。ただし、「第9」のほうがひねりのきいた方法をとる。「死」を中心に置きながら、それを「生」へと越え出ていく「第5」と、より深く「死」に沈潜していく「第9」。純器楽の2曲は対照的な姿をとる。その対照性を楽しむのも、マーラー鑑賞のひとつの在り方だろう。

最初で最後の交響曲

マーラーの交響曲創作史のはじめに、大きな影響を与えた作曲家がいる。ハンス・ロットだ。ロットは1858年生まれで、マーラーより二つ年長。二人ともウィーン音楽院の作曲クラスで学んだ。ロットは交響曲を1曲書いた。そしてそれが最初で最後の交響曲となった。作品完成の4年後、1884年に25歳で亡くなったからだ。

ロットは1878年にまず第1楽章を書き上げ、それを音楽院の卒業制作とした。しかし、作曲部門の第1位を逃す。このとき最優秀に輝いたのが、同期生マーラーの書いたピアノ五重奏曲だった。マーラーの母親はこの結果を知り、ロットの作品のほうが良かったのに、と話したとされる。

第1位を逃しロットは大きな衝撃を受けたが、その後2年かけて交響曲を完成させた。この完成品を今度は、ベートーヴェン賞の応募作品とした。尊敬するブラームスが審査員だったこともあり、ロットはこの先輩音楽家に事前に交響曲を弾いて聴かせ、アドバイスを求めた。酷評だった。音楽家をやめたほうがよい、とまで言われた。打ちひしがれたロットはウィーンを離れ、ドイツ語圏西端のミュルハウゼン（アルザス）で、その地の合唱指揮者となることにした。同地に向かう列車の中でロットは、ブラームスが車両に爆弾を仕掛けた、という妄想に囚われる。そのまま病院に送られ、1884年に結核で亡くなった。享年25。

彼の交響曲を評価したのは、マーラーの母親だけではない。ブルックナーは音楽院の作品審査で「やがてこの若者から、もっと偉大なものを聴くことになる」と評した。ベートーヴェン賞の審査員だった批評家のハンス・リッックは「鮮やかに訴えかけるものを持つ」とコメントした。

誰よりもロットとその交響曲を高く評価していたのが、マーラーだ。その証拠にマーラーは、自らの交響曲第1番にその楽想を引用し、その構成法、とりわけスケルツォの書き方を取り込んだ。マーラーはロットの死の20年後、友人に向けて次のように語った。「20歳の時に書いた交響曲でロットは、天才の翼を高く広げている。誇張でなく、これは彼を新しい交響曲の確立者にするほどの作品だ」

〈第九〉は交響曲ではない

ベートーヴェンの〈第九〉は交響曲ではない、と言ったらどれほどの反論が出るだろうか。たしかに声楽が入っている点で型破りだが、本人が交響曲と言っているのだから交響曲だろう。だが、実のところ〈第九〉は交響曲であってはならない。

〈第九〉は第3楽章までの器楽部分を第4楽章でことごとく否定し、それに代わる最高位のものとして声楽が立ち現れてくるという構造をとる。この視点から純器楽の部分を眺めれば、それは「劇中劇」の一種であることがわかる。シェイクスピア劇が始まったと思いきや、やがてそれが否定され、新たな演劇の理想が語られる現代劇へとなだれ込む。〈第九〉はそんな芝居と同様、自己言及の仕組みを持っている。このような芝居をシェイクスピア劇と言うのが適当でないように、〈第九〉を交響曲というのもふさわしくない。〈第九〉は「声楽を内包する交響曲」なのではなく、「交響曲を曲中曲として内包する声楽曲」なのだ。

〈第九〉の声楽曲としてのメッセージは、作曲者の共和主義と分かちがたく結びついている。交響曲に代わり声楽・軍楽・教会音楽とその三者の融合体とが登場する。富裕層の慰みものの「交響曲」が否定され、「シラーの書いた飲み屋歌」（当時、街の酒場でこの詩を放歌するのが流行



〈第九〉を演奏する読響 ©読響

った）、「歩兵の行進曲」（軍楽隊の楽器が登場する）、「御堂に響く聖歌」（教会風の単旋律）がひとつになる構造。つまり、ベートーヴェンの目指した平等社会が音楽上で実現しているというわけだ。聖と俗と、その両方に足場を持つ人間とが最終的に融合するというベートーヴェンの理想は、ジャンルの壁を乗り越える原動力となった。

（さわたになつき・音楽評論家）

※読響は9/10にロットの交響曲を、9/20～22にマーラーの交響曲第5番を、12月にベートーヴェンの〈第九〉を演奏します。詳しくは、24ページ、読響ホームページなどを御覧ください。

基本スペック

181cm、86kg、O型
ベルリン生まれ

ニックネーム

子どもの頃のあだ名は
「バステイ」

好きな食べ物は？

もちろん日本食！
その中でも何が好き？
しゃぶしゃぶ

飲み物だと？

うーん、白ワイン
SAKEも好き

趣味は？

やっぱり音楽かなあ
それと、食べることも
Enjoy food!

特技を教えてください！

ハンガリー語とロシア語は得意
あと、どんな街でも良いレストラン
を見つけられること

何色が好き？

ブルーだね

好きな国

もちろん日本だよ
これまでの来日回数は？
たぶん22回



たまにしか更新してないけど(^-^)
インスタやってます！

📷 sebastianweigle

日本でのお気に入りの場所は？

六本木。今は上野公園かな
(東京文化会館での公演のために、
毎日歩いて通っていたので)

尊敬している人

お父さんとお祖父さん
作曲家では…選ぶのが
難しいけどJ.S.バッハかな

もしも指揮者にならなかったら
何になっていた？

バスの運転手。これは小さい頃の夢だった
大きなバスを運転するのがカッコよくて

ヴァイグレって、
どんなマエストロ？

座右の銘は？

Enjoy your life.
Be happy.

無人島に一つ持って行けるなら
何を持っていく？

うーん、悩むなあ
本、トーマス・マンの
『魔の山』がいいな

自分を動物にたとえると？

犬かな・・・いや、やっぱり
鷲(イーグル)のなんか空を飛んで
いる感じで、ものを俯瞰して見て
いるところが鷲だと思う

魔法が一つだけ使えるとしたら何をしたい？

世界から戦争をなくしたい

オペラや映画などの登場人物になれると
したら、どの作品の誰になってみたい？

コメディアン的なものだと思う
そう、『魔笛』のパパゲーノ！

読響常任指揮者 セバスティアン・ヴァイグレ

2019年4月から第10代常任指揮者を務めるドイツの
名匠。1961年生まれ。父は教会のカントー、叔父は
指揮者という音楽一家で育つ。82年からベルリン国立
歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍し、日本にもたび
たび訪れ、各地を回った。90年代後半に巨匠バレンボ
イムの勤めで指揮者に転身。2004年から09年までバ
ルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、08年か
らフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年
に同歌劇場管が『オーパヴェルト』誌の「年間最優秀
オーケストラ」に選ばれ、15年と18年にも同歌劇場が
「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価さ
れている。パイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭、ウィ
ーン国立歌劇場、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン歌
劇場、ベルリン放送響、ウィーン響などでも活躍している。

9月の公演

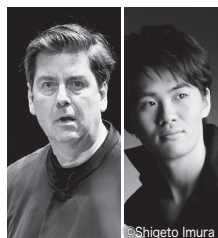
ロットに光を！ ヴァイグレが隠れた傑作に思いを込める



9/10 火 第591回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）
チェロ＝アルバン・ゲルハルト
プフィッツナー：チェロ協奏曲 イ短調（遺作）
ハンス・ロット：交響曲

明るいサウンドと軽快なリズムによる華麗なる〈イタリア〉



9/14 土 第114回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）
ヴァイオリン＝小林吉成
モーツァルト：歌劇〈魔笛〉序曲
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲
メンデルスゾーン：交響曲 第4番〈イタリア〉

ヴァイグレがマーラー 第5番を振り、ピアノの巨匠が共演！



9/20 金 第625回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

9/21 土 第220回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

9/22 日 第220回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮＝セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）
ピアノ＝ルドルフ・ブッフビンダー
ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第4番
マーラー：交響曲 第5番

9月公演の聴きどころ

9月は、常任指揮者ヴァイグレが三つのプログラムで登場。

9/10《定期》 ヴァイグレが約20年前に知り、これまでに10以上の楽団で演奏を重ねてきたロットの交響曲を取り上げる。ブルックナーのオルガンの弟子で、マーラーに影響を与えたロットの交響曲は、オルガン的な色彩感のある豊潤な響きにあふれ、いたるところにマーラー作品の着想が表れている。ヴァイグレは「ロットの音楽を広めることに使命を感じている」と意欲を語っており、25歳の若さで亡くなった悲運の作曲家の魅力を、存分に感じさせてくれるだろう。前半は、ヴァイグレが絶賛し共にCD録音も行っているゲルハルトをソリストに迎え、珍しいプフィッツナー作品を取り上げる。

9/14《みなとみらい》 ドイツの名匠ヴァイグレが、メンデルスゾーン〈イタリア〉を指揮する。この曲は、イタリアを旅した作曲家の楽しい気分が表れている開放的な作品。ベルリン国立歌劇場で多くのバレエ公演を指揮したヴァイグレが、躍動感あふれるリズムを生み出す。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲では、ベルリンで研鑽を積む小林吉成がヴァイグレの指名により共演。レガートを駆使して流麗なメロディーを熱いパッションで奏でる。また〈魔笛〉序曲では、歌劇場でキャリアを積み、本オペラは100回以上指揮しているというヴァイグレの手腕が発揮されるだろう。

9/20《名曲》、9/21、22《土日マチネー》 ヴァイグレがベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者時代に、スウィトナー、バレンボイムら巨匠の指揮のもとで演奏したというマーラーの交響曲第5番を振る。バラエティに富んだ五つの楽章からなり、死から生へという流れが印象的なマーラーの傑作を、迫力あるサウンドで壮大に作り上げる。有名な第4楽章“アダージェット”の叙情的なメロディーも堪能したい。前半は、現代最高峰の“ベートーヴェン弾き”と言われるブッフビンダーとのピアノ協奏曲第4番。名匠ならではの至芸に期待が高まる。

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390（10時～18時・年中無休）<https://yomikyo.or.jp/>

（文責：事務局）

世界的巨匠テミルカーノフが指揮する衝撃の〈バビ・ヤール〉



10/9 水 第592回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=ユリー・テミルカーノフ(名誉指揮者)
バス=ピョートル・ミグノフ
男声合唱=新国立劇場合唱団(合唱指揮=富平恭平)
ハイドン:交響曲 第94番〈驚愕〉
ショスタコーヴィチ:交響曲 第13番〈バビ・ヤール〉

興奮のクライマックス! 巨匠が振るチャイコフスキー第5番



10/14 月・祝 第115回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

10/15 火 第626回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮=ユリー・テミルカーノフ(名誉指揮者)
ヴァイオリン=エマニュエル・チェクナヴォリアン
シベリウス:ヴァイオリン協奏曲
チャイコフスキー:交響曲 第5番

《情熱のブラームス》 豊潤な響き、たつぷりと歌い込むメロディ



10/19 土 第221回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

10/20 日 第221回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=ユリー・テミルカーノフ(名誉指揮者)
ヴァイオリン=セルゲイ・ハチャトゥリアン
ブラームス:ヴァイオリン協奏曲
ブラームス:交響曲 第2番

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

小林が魂を込める〈新世界〉、新鋭・伊藤が奏でる郷愁の旋律



11/17 日 第116回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮=小林研一郎(特別客演指揮者) チェロ=伊藤悠貴
ドヴォルザーク:チェロ協奏曲
ドヴォルザーク:交響曲 第9番〈新世界から〉

現代音楽に長けた中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン



11/18 月 第23回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30(プレ・トークあり)

《中川賢一と読響メンバーによるライヒ&メシアン》
ピアノ=中川賢一*、小坂圭太 ヴァイオリン=瀧村依里*、對馬哲男 チェロ=遠藤真理*、高木慶太 フルート=倉田優、片爪大輔 クラリネット=金子平*、芳賀史徳 打楽器=西久保友広、野本洋介 音響=有馬純寿
ライヒ:クラッピング・ミュージック
ライヒ:ダブル・セクステット
メシアン:世の終わりのための四重奏曲*

チェコの俊英ネトピルが振る〈ブラハ〉と〈シンフォニエッタ〉



11/23 土・祝 第222回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

11/24 日 第222回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=トマーシュ・ネトピル ピアノ=アレクサンドル・タロー
モーツァルト:歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉序曲
モーツァルト:交響曲 第38番〈ブラハ〉
プーランク:ピアノ協奏曲
ヤナーチェク:シンフォニエッタ

スークの傑作〈アスラエル交響曲〉&リゲティではケラスが共演!



11/29 金 第593回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=トマーシュ・ネトピル チェロ=ジャン=ギアン・ケラス
モーツァルト:歌劇〈皇帝ティートの慈悲〉序曲
リゲティ:無伴奏チェロ・ソナタ
リゲティ:チェロ協奏曲
スーク:アスラエル交響曲

■パルTAMA主催 読響しんゆり名曲コンサート

8/28 15:00
水 昭和音楽大学テアトロ・ジューリオ・ショウワ

指揮=太田 弦

ソプラノ=廣田美穂

テノール=笛田博昭

ブッチーニ: 歌劇《蝶々夫人》から“ある晴れた日に”

ブッチーニ: 歌劇《トゥーランドット》から“誰も寝てはならぬ”

チャイコフスキー: 交響曲 第5番 ほか

[料金] 一般 ¥4,800 親子ペア ¥5,800 学生 ¥2,000

[お問い合わせ] チケットバルテノン 042-376-8181 (10~18時/休館日・定休日を除く)

■井上道義×牛田智大×読響 《華麗なるプロコフィエフ》

8/31 14:00
土 かつしかシンフォニーヒルズ モーツァルトホール

指揮=井上道義

ピアノ=牛田智大

プロコフィエフ: ピアノ協奏曲 第3番

ペンデレツキ: 広島犠牲者に捧げる哀歌

プロコフィエフ: 《ロメオとジュリエット》組曲から

[料金] SS¥5,800 S¥5,000 A¥3,500 B¥2,500 Z¥2,000

[お問い合わせ] かつしかシンフォニーヒルズ 03-5670-2233 (10~19時/休館日を除く)

■武蔵野合唱団 第52回定期演奏会

10/3 19:00
木 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=小林研一郎

ソプラノ=澤江衣里

テノール=高橋 淳

バリトン=大沼 徹

合唱=武蔵野合唱団

児童合唱=フレーベル少年合唱団

チャイコフスキー: 大序曲《1812年》

オルフ: カルミナ・ブラーナ

[料金] S¥6,500 A¥5,500 B¥4,000 ヤングシート ¥1,500

[お問い合わせ] 武蔵野合唱団 080-4811-4866